

まちかねミュージアム

目次：			
コロナ禍における総合学術博物館の取組について	1	私にもできるアウトリーチ	3
こんなにやってるアウトリーチ	2	博物館のデジタル化対応について	4
こんなにやってたアウトリーチ	2	新収蔵品の紹介	4
企画展・特別展の予定	3		

コロナ禍における 総合学術博物館の取組について

新型コロナウイルス感染症拡大により、大阪では2020年4月から2021年6月までの間に3度にわたり緊急事態宣言が発出され、大阪大学総合学術博物館でも、地域の他の博物館と同様に大きな影響を受けました。

当館では、毎年二回、春と秋に展覧会を開催していますが、2020年の春（当初予定2020年4月24日～7月18日）に開催を予定していた「第14回特別展 なんやこりゃ EXPO'70 - 大阪万博の記憶とアート -」は、大阪にとって歴史的なイベントといえる1970年に開催された「日本万国博覧会」から50周年を記念して開催を予定していたものではありません。開催後の大阪の街づくりや人々の意識に及ぼした影響の大きさを重視して、北摂地域のミュージアムが連携する北大阪ミュージアム・ネットワークと協力して2018年から企画を実施していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大による総合学術博物館の閉館のため、予定通りの開幕はできませんでした。

その後の総合学術博物館再開館にあわせ、少しでも展示鑑賞いただける機会を増やすため、会期を延長する形（2020年6月22日～8月1日）で開催いたしました。再開にあたっては、入館人数を制限するとともに、入館の際に「健康チェックシート」を記入いただくことによる入館者管理、また、館内の設備変更や毎日の全館アルコール消毒など運営・設備の両面から感染予防・拡大防止措置を講じております。

また、詳細は後述いたしますが、当館のホームページ上に「デジタル博物館」を開館し、展示担当教員による解説付きの第14回特別展紹介動画を公開す



館内の新型コロナウイルス感染症対策の一例

ることで、実際に博物館を訪れなくても、特別展を鑑賞できるようにいたしました。また、この「デジタル博物館」は上述の特別展だけにとどまらず、常設展示の紹介など、対応展示を拡大させております。

さらに、デジタル博物館だけにとどまらず、ホームページ上で連載コラム「中村貞夫とその芸術」を配信し、閉館中も多くの方と「人・モノ・情報」の交流の片鱗を感じていただけるようにしております。

2020年の秋の展覧会（2020年10月31日～2021年1月30日）は流行下での開催を想定して準備をすすめ、会期の終盤に二度目の宣言が発出されても当初の予定通り会期を終了することができました。一方で2021年春の展覧会（当初予定2021年4月27日～8月10日）は会期変更を余儀なくされましたが、デジタル博物館を通じた展示品の紹介、完全オンライン化したミュージアムレクチャーなど、コロナ禍においてもみなさまに博物館を楽しんでいただけるよう、努めております。

こんなにやってるアウトリーチ

大阪大学創立 90 周年 / 大阪外国語大学創立 100 周年記念事業

大阪大学総合学術博物館 大学創立周年記念展
街に生きる学問

—学都大阪の礎・つなぎあう想い—

会 期：2021 年 6 月 3 日(土)～

8 月 10 日(火)

会 場：大阪大学総合学術博物館、豊中市

共 催：大阪大学外国語学部、大阪大学適塾記念
センター、大阪大学アーカイブズ、
大阪大学大学院文学研究科懐徳堂研究セ
ンター、豊中市市民ホール等指定管理者

協 力：咲耶会(大阪大学外国語学部・大阪外国
語大学同窓会)

大正時代後期から昭和初期の大阪は、「大大阪」と呼ばれ東京をしのぐ東洋一の大都市でした。

経済、産業、文化の発展には、当時大阪になかった総合大学の設置が必要不可欠であり、市民と自治体が一体となって、1931(昭和6)年に大阪大学(当時は大阪帝国大学)は誕生しました。

それに先立つこと1921(大正10)年に「大阪に国際人を育てる学校を」の想いから篤志家の林蝶子が私財を寄付して大阪外国語学校が設立されました。1949(昭和24)年に全国でも二校しかない国立の外国語大学として生まれ変わった大阪外国語大学は、2007(平成19)年には大阪大学と統合しました。大阪大学外国語学部としての再出発です。両大学の強みを生かしたさらなる教育・研究の展開を進め、この春には外国語学部の箕面新キャンパスが誕生しました。



「大阪大学総合学術博物館 大学創立周年記念展
街に生きる学問 —学都大阪の礎・つなぎあう想い—」展示室の様子



今年2021(令和3)年には大阪大学の創立90周年、大阪外国語大学の創立100周年を迎えました。両大学は生い立ちこそ違えど、人びとの想いをつなぐことにより生まれ育まれ、学問を究め社会の発展に貢献してきました。

学都大阪の礎となり、世界に羽ばたく大学としてどのように発展してきたのか、一世紀にわたるその歩みを振り返ります。



展示品「緒方洪庵の薬箱」(壮年期使用)

適塾記念センター所蔵(緒方裁吉氏旧蔵)(※後期展示)

こんなにやってたアウトリーチ

・体験!こどもミュージアム@大阪大学

文系・理系を問わず様々な分野に対する興味や関心を、子供たちに持ってもらうことを目指して、当館では「体験!こどもミュージアム@大阪大学」を開催しています。自由応募制(小学校3-6年生対象)という形で、豊中市教育委員会、池田市教育委員会、箕面市教育委員会、大阪市教育委員会からの後援と大阪大学21世紀懐徳堂の協力のもと実施してまいりました。2019年度は「浮沈紙 時計反応(ヨウ素液)」「シロクロワールド~水墨xうちわをつくる!~」「簡単リニアモーターカーを作ろう」というテーマで実験・実演を交えた体験型授業を行い、

参加した子供達からも好評でした。



2020年度、2021年度も実施予定ではありましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止とさせていただきます。来年度以降、情勢が落ち着きましたら再開を予定しております。

・～繋げる・広げる～わくわく学習教室 with Osaka University

当館では小学生を対象とした体験型講座として「～繋げる・広げる～わくわく学習教室 with Osaka University」を実施しております。本企画は、株式会社新興出版社啓林館がCSR活動として実施している「～繋げる・広げる～わくわく学習教室」を、大阪大学を会場とし、本館と共催して行ったもので、2019年までに2回開催いたしました。開催にあたっては、豊中市教育委員会、大阪市教育委員会、箕面市教育委員会、池田市教育委員会からの後援と大阪大学21世紀懐徳堂の協力をいただきました。本企画は「理科」に特化した取り組みですが、学外から講師を招へいするなど、上記の「体験！こどもミュージアム@大阪大学」とは異なるアプローチで実施しました。小学校3・4・5・6年生を対象とした講座はいずれも実験・実演を交えた体験型授業で、子供達が楽しんで参加できるイベントとなりました。



「体験！こどもミュージアム@大阪大学」と同様に2020年度、2021年度も実施予定ではありましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止とさせていただきます。来年度以降、情勢が落ち着きましたら再開を予定しております。

企画展・特別展の予定

特別展「乙女文楽」

会期:2021年10月18日(月)～12月18日(土)
(予定)

概要:乙女文楽とは昭和初期に大阪で誕生した一人遣いの人形浄瑠璃の総称です。当時流行した少女歌劇などを手本に人形遣いは主に十代の少女が担い、床の浄瑠璃は素人義太夫や女流義太夫によって担われたとされています。人形は三人遣いの文楽人形をもとにした大振りのものを一人で遣えるよう改造されていました。昭和戦前期の大阪で活発に活動がなされましたが、全国に伝えられ、現在ではその土地で郷土芸能化した乙女文楽も存在しています。

戦後の大阪には、戦前の系譜を引き継ぎながら、活動を続けていた乙女文楽の集団がいくつかありましたが、その中でも比較的規模の大きな「大阪娘文楽座」という乙女文楽の一座がありました。昭和44年に「大阪娘文楽座」は解散しますが、その衣装類の多くは後に大阪大学に寄贈されました。今回はその衣装を中心に乙女文楽の歴史を振り返る展覧会を開催します。

私にもできるアウトリーチ

大阪大学総合学術博物館を、大阪大学の研究者の皆様のアウトリーチの場として活用してみませんか?簡単なところでは、サイエンスカフェ等のコーディネーターから、特別展まで、いろいろな規模のアウトリーチ等が可能です。まずは総合学術博物館(kyousou-museum-tekijuku@office.osaka-u.ac.jp)までお気軽にご相談ください。

博物館のデジタル化対応について

より多くの方に大阪大学 総合学術博物館を楽しんでいただくために「デジタル博物館」を開館いたしました。

これまでに開催した特別展や常設展など、教員の解説つきで公開しております。是非一度ご覧ください。

・博物館内紹介動画

<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/digitalcontents/vrtour/>



・常設展示紹介動画

<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/digitalcontents/permanentcollection/>



・特別展紹介動画

<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/digitalcontents/expo70/>



新収蔵品の紹介

ドキドキする時代のアート

EXPO'70 四谷シモン「ルネ・マグリットの男」

山高帽子にフロックコートの奇天烈な男。1970年の大阪万国博覧会で観衆のドギモを抜いた「せんい館」のロビーを飾った一体である。

同館は「繊維は人間生活を豊かにする」をテーマに日本繊維館協会が出展したが、横尾忠則（1936～）が建築にかかわり、「クラインの壺」をヒントに「建物の赤色の床面が天井を突き破って外部にニョッキと赤い男根のように表出しているという四次元の概念を三次元で表現できないものか」というのがコンセプトであった。さらに横尾のひらめきで、ドームの周囲に工事用足場と作業服の人形8体を取りつけ、未完成の美を表現したユニークなパビリオンとなった。

内部も斬新なアイディアに満ちている。高さ20メートルのドーム壁面に巨大な彫刻の女性像が重なるように設置され、それをスクリーンに、実験的映像作家・松本俊夫（1932～2017）による「スペース・プロジェクトン“アコ”」が映写された。1970年代の青春のイメージや新しい衣環境を、「アコ」と呼ぶ若い女性の春夏秋冬に見立てた映像である。

そのロビーで度肝を抜いたのが、人形作家で唐十郎の状況劇場の俳優であった四谷シモン（1944～）が制作した15体の人形である。シュルレアリスムの巨匠ルネ・マグリット（1898～1967）の作品に登場する山高帽子にフロックコートの男をモデルにしたもので、万博開催中は、繊維に見立てた赤いレーザービームが頭部から出て“あやとり”をし、

内蔵スピーカーから作曲家湯浅譲二（1929～）による各国語による言葉が聞こえた。本像の帽子にもレーザービームの装置が取り付けられていたと思われる痕跡がある。

記念碑的なこの一体は、万博開催から50年目にあたる昨年（2020年）、第14回特別展「なんやこりゃ EXPO'70 -大阪万博の記憶とアート」でも来館者を驚かせ、展覧会終了後、本館の所蔵となった。ジャンルを超えて前衛芸術家たちが参加したEXPO'70を象徴する貴重な作品である。（橋爪 節也）



（上図版）四谷シモン「ルネ・マグリットの男」、「せんい館」のイメージを再現した赤い壁に立ち、特別展会場でも異彩を放つ。背後の「せんい館」のポスターは横尾忠則のデザイン。「せんい館」で流された湯浅譲二による音響も、本展では再生された。

編集後記

当館の新しい職員として、8月16日に研究支援推進員の波瀬山祥子さんが着任されました。専門は日本美術史で、江戸時代の絵画の研究をされてきた方です。新たなメンバーとともに、大阪大学の皆様のアウトリーチ活動のお手伝いや地域社会への貢献に努めてまいります。どうぞよろしくおねがいします。

大阪大学総合学術博物館ニュースレター

まちかねミュージアム

発行日 2021年8月16日

編集発行 大阪大学総合学術博物館

グローバル情報委員会

〒560-0043

大阪府豊中市待兼山町1-20

大阪大学総合学術博物館 事務室

Tel : 06-6850-6284

<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/>